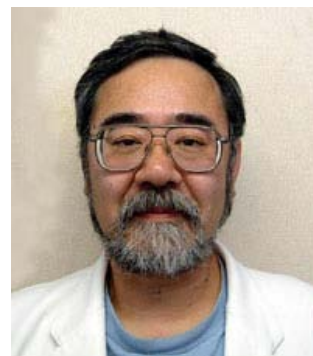


この度、前任の羽根田前院長の辞職に伴い、市立根室病院の院長職を拝することとなりました。



皆様ご承知の如く、我が市立根室病院は四発のエンジンの内三発が止まり、残りの一つのエンジンで辛うじて飛び続けている状態です。それも敢えて申し上げれば超低空飛行です。しかもこれは我が市立根室病院だけの問題ではなく、北海道中の地方病院で同じ現象が多発しています。更に言えば、もはや全国的な現象と言えるでしょう。

その大きな原因としては勿論、現在の研修医制度により大学を卒業した医師がより条件の良い都会の病院に流れ、本来彼らの実家であるべき大学が空っぽになってしまった現状にあります。

しかし、原因は果たしてそれだけでしょうか。市や市民、病院を挙げての医師招聘の努力不足や出足の遅さ、些細な事で深夜に病院を訪れ、数少ない当直医を更に疲労に追い込む住民事情(常勤医の夜間当直は、翌日も通常通りの診療が待っています。)など、これを機会に市も病院も、そして住民も反省すべき点が多々あるように思います。

『雨降りて地固まる』とは、先人の貴重な教えです。何時の日にか「あの頃は病院も大変だったな」と根室市民が笑って語れるように、今年の三月に病院を去った多くの医師たちが、また根室に戻ってきたくるように、そして、その時こそ「お帰りなさい！」と皆で玄関先で迎えられるように、、、、、、、、。そんな夢を少しでも現実のものにして行く事が私の仕事だと覚悟しております。

最後に私の大好きな映画『アポロ十三号』の一節で締めくりたいと思います。

アポロ十三号が重大なトラブルに見舞われた地球への帰還が極めて難しくなった時、NASAの管制室に重苦しい空気が流れます。そして或る者が「NASA始まって以来の最悪の日だ！」と叫びます。しかしそれを聞いたエド・ハリス演ずる主任管制官がこう切り返します。「お言葉だが、今こそNASAの栄光の時だ！」。

市立根室病院
院長 荒川 政憲